特集「資料論」について―遅ればせの趣旨説明

もう四半世紀も前のことになるが、大学院生のころ、資料と史料との関係について議論（？）したことがあった。きっかけは忘れてしまったが、私が「資料の中に史料がある（含まれる）」と言ったところ、先輩の某氏が「それは違う。史料の中に資料があると考えるのが正しい」と有無を言わさず非難したのである。私は、史料という漢字表記にはいろいろな意味があって、文字で記されたものという語義通りの主張をする必要はないと考えるが、考古資料は考古史料とは言わない、と反論した。

しかし、その一方で、その頃の私は、現在の日本を無意識のうちに過去に遡らせて、「縄文時代の日本（列島）」などと表記することに何の矛盾も感じなかった。日本考古学は日本史の中で、文献資料ではわからない時代と領域を扱う歴史学であるという「常識」に浸かっていたのであり、日本考古学という枠組みを用いることが、国民国家を再生産することなど露程も疑っていなかった。その後、網野善彦の主張に触れて、「日本」成立以前に日本はない、ということの意味を考えるようになり、さらに、南山大学に来て、「日本を対象とする考古学」という枠組みを再考する機会を蚊帳の外からとはいえ、与えられたのは幸いであった。

先の論争について、今となって言えることは、資料とは史料の上位概念であるということにほぼ尽きる。英語表記では、資料は materials であり、史料は historical materials つまり歴史資料となる。資料の一部を形容詞で限定したものが歴史資料すなわち史料である。このように考えれば、史料の中に資料があるというのは、歴史研究者がさまざまな史料を分析対象とするとき、それらが他の学問分野からは資料（これに形容詞がつく場合もある）と呼ばれているという現実を無視した議論と言わなければならない。

研究者が自分の専門分野固有の概念を重視することは、それが便利だからと言えることは間違いない（そのわりに概念論争は少なくないが）。その上で、自分の専門分野に対する責任と自負を背景に、他の研究分野を眼中に入れないような発想が、歴史学を貧困にしてきたのではないか。すべては歴史研究の対象となる史料であると歴史研究者の視点から言い、歴史資料の一部を他の学問分野の人々は関心に応じて利用するのであるから史料の中に資料があるとする発想は、歴史学以外の学問を無意識のうちに認めていないと批判されよう。むしろ初心に立ち返って、歴史学が史料とよぶ資料を、他の領域の研究では固有の関心と方法に基づいて、どのように分析しているかを知る機会（謙虚さ?）があってよいのではないか。

しかし、残念なことに資料分析入門を謳った書籍は、多くの場合、当該分野の初学者を念頭に置いて書かれる。そうでなければ、各分野での資料分析について各論者がもっとも得意とするところを開陳して興味を誘う形式が取られる。悪く言えばつまみ食いであるが、最良の料理人によって調理された資料読解の勘所が面白くないはずがない。その面白さは、次に控えている作業との落差にかなりの躊躇を覚えさせるのであるが。

逆説的ではあるが、南山学園史に関する歴史資料を収蔵対象の一方の極とする南山アーカイブズは、すべてが南山学園史の歴史資料として扱われてもよい。どのように扱われるかは、利用者に委ねられている。諸個人が自己の関心と方法に基づいて資料を分析する方法の多様性を、異なる方法を用いて資料にアプローチする他者に示すことで、双方向の議論が可能となれば言うことはない。そこまでいかずとも、自分とは異なる方法があることを認識し、そのように他分野に開かれることを意識した姿勢は、いつか自分が属する分野に還流し、自己の方法を再検討する契機となる。そんな大それたことを言わずとも、まずは多様な「資料」論の世界（のごく一部）に浸かってみてほしい。

（永井英治）